２．教員の自著紹介

星野幸代『日中戦争下のモダンダンス――交錯するプロパガンダ』汲古書院

本書は日中戦争から太平洋戦争前後に、プロパガンダ（国内宣伝・対中立国宣伝・対敵宣伝のいずれか）を担って大陸中国・日本・台湾をめぐるモダンダンス、およびそれを踊った舞踊家を主たる対象とする。中国、台湾の舞踊家を中心とするが、若干の日本人舞踊家、朝鮮人舞踊家をも含む。方法としては、新資料と従前の大陸中国、台湾の舞踊史とを照合しつつ、従来政治的な理由で顧みられなかった状況、トピックを中心に再現し考察する。但し、網羅的に論じることは不可能であるため、舞踊史における重要人物を中心に日中戦争期における創作動機及び背景を考察することを目している。なお､本書にいう「モダンダンス」とは、古典バレエや民族舞踊ではない、20世紀のモダニズムを反映するダンスを指している。

日中戦争期、中国の国民党統治区では移動演劇隊や児童劇団が桂林から重慶にかけて各地を抗日宣伝し、日本軍が沿岸都市から内陸へ侵攻するにつれて重慶に集結し、抗日をテーマとした話劇（中国近現代演劇）を盛んに上演した。舞踊家はこうした話劇のスタッフとして行動をともにした。さらに折々舞踊コンサートを開き、抗日宣伝し義捐金を集めた。それに対し帝国日本は対外的文化工作として帝国主義を賛美する舞踊を奨励するとともに、国内、また中国の日本占領区で日本軍の士気を高め、大東亜共栄圏を宣伝し、銃後の増産を称揚する舞踊を奨励した。そのため、陸軍省やラジオ局、新聞社がスポンサーとなり、日本軍の駐留する大陸中国の各地域、また国内の軍需工場を日本の舞踊家および舞踊団が慰問した。植民地の舞踊家たちも、占領下の“日本人”として慰問に加わっていた。

本書の構成は第一章が総論、それ以降は人物を中心とした各論である。第一章では、民国期中国におけるモダンダンスの受容を、上海を中心に概観する。清朝のごく限られた貴族階級で受容されたモダンダンスから、それを教養として受容した五四時期の知識人たちに触れ、1930～40年代中国におけるモダンダンス受容の要となった上海で踊られた舞踊を概観する。その中の各論として、30年代に一世を風靡した黎錦暉のレビューを追う。娯楽レビューも中国でも近代国家における言語の制度化を動機とし、近代的身体発育を当初の目的としており、モダニズムから生じたのである。

第二章では、植民地出身の舞踊家として台湾の蔡瑞月、李彩娥に焦点をあて、関連して朝鮮の崔承喜の影響を視野に入れつつ、戦時期のそれぞれの舞踊活動を追う。帝国日本の「同胞」の名目ながらも国内外で踊ることは、彼女たちにとって台湾・朝鮮の民族性をアピールするための戦略でもあった。

第三章では、上海で発生した当初は白系ロシア人を中心に結成されながら、戦時期には日本に接収され、日本の文化工作を担った上海バレエ・リュスについて、その活動と中国モダンダンス史との接触を考える。

第四章は、1930年代の呉暁邦にスポットをあて、彼が東京で舞踊留学をしながら上海で舞踊研究所を主催し、上海文芸界にモダンダンスを位置づけていく様を跡づける。

第五章ではトリニダード・トバゴ華僑で英国にてモダンダンスを学んだ戴愛蓮が、中国保衛同盟をスポンサーとしてダンスを通じて抗日活動をする様を追う。

第六章では、呉暁邦、戴愛蓮のモダンダンスが戦災児童教育支援という形で合流するまでをたどる。

中国のモダンダンスは、舞踊の性質上音楽界と切り離せないのはもとより、話劇と強く結びつき、話劇人が映画界にシフトすると映画界にコミットし、漫画家とも接触を持った。さらに米英人の抗日組織に支援され、戦災児童教育にも深くかかわった。いわば中国モダンダンスは、欧州における舞踊と同様に、文学・演劇また様々な芸術の「結節点」であった。従って、本書は文芸界の知識人交流に軸足を置いた日中近現代舞踊史研究というスタンスをとり、同時に中国の各文芸研究の間隙をつなぐことを意識している。

なお、本書は平成28年度科学研究費研究成果公開促進費（学術図書）の助成により出版された。